
夜逝列車

空野 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜逝列車

【Nコード】

N4554B

【作者名】

空野 葵

【あらすじ】

人は死んだ後、どこへ行くのだろうか……？あの世とこの世の狭間で、ある男が見たものとは。

（前書き）

夜逝列車と書いて「やこうれっしゃ」と読みます。

「お父さん、今日は絶対に早く帰ってきてね。約束だよ！」

俊也は、ふと幼い娘の言葉を思い出し、顔をほころばせた。

今日は娘、香奈の六回目の誕生日だ。いつも残業で帰りが遅くなってしまう俊也だったが、今日だけは違う。何としても一緒に誕生日を祝ってやりたかった。

いつも、ひとりぼっちで留守番している香奈のために。

「くそ、また赤かよ……」

目の前で変わった信号に舌打ちする。夕焼けはいつの間にか、闇へと様変わりしていた。焦る気持ちちが俊也を苛立たせてゆく。

俊也がたつぷり五回は悪態をついたところで、ようやく信号の許しが出た。思いっきりアクセルを踏み、そのままの勢いで右折しようとする。対向車は来ていない……はず、だった。

次の瞬間、目も眩むような光と共に、落雷にも似た凄まじい衝撃が俊也を襲う。フロントガラスから放り出され、路上に左肩から打ち付けられた俊也が最後に見たものは、トラックの下敷きとなり、大破した愛車の姿だった。

++++

——ここは、どこだ？

気がつくと、俊也は薄暗い階段を上っていた。

足は止まらなかったし、止めようとも思わなかった。ただ、何百何千という人の波に押されて、少し苦しかった。何故上っているのだろうかという気もしたが、別にどうでもよかった。

何も、考えられなかった。

気が遠くなるほどの長い階段をようやく上りきると、まるで小さな穴から這い出たかのように、視界が開けた。相変わらず薄暗く、豆電球で照らしているかのようなだったが、そこには人間の塊があった。おそらく、何万という人間が、俊也の目前に存在したのだ。さらにその向こうには、古びてはいるが、黒光りしている蒸気機関車の姿もある。その車両はどこまでも続いていて、黒煙が覆っていた。

「……！！」

俊也は、その黒光りする機関車を見たときに涙があふれるのを、抑えることは出来なかった。

理由など知ったことじゃない。

ただ、身体が震えるほど、懐かしかった。

人々が、先を競うように改札らしき場所に並ぶのにつられ、俊也も最後尾に歩を進める。早く乗りたい、早く乗りたい……！その感情だけが身体を支配していた。

一刻も早くあの機関車に乗って全てを終わらせたい！！

——俺は、何かを……忘れている？

突然俊也の足が止まる。頭が痛い。何も考えられないのに、必死で記憶を辿った。

——俺は、誰だ？そして……

「どうぞ」

近くで響いた声にはっと前を見ると、俊也の前にいた五十歳位の女性が、黒い切符を受け取っていた。そして後ろから押されるように、俊也の番になる。しかし、俊也に差し出されたのは黒い切符ではなかった。

「おめでとう」

につこりと、駅員が燃えるような赤い切符を、俊也の右手にのせる。その瞬間、記憶が流れ、湧き上がり、溢れ出る。頭を思い切り殴られたような衝撃が俊也を襲った。——浮かび上がる、幼い娘の横顔。

「あ……あ、香奈っ、香奈！！」

「大当たりっ！十年に一人の、大当たりいっ！！」
駅員が、誇らしげに叫んだ。

++++

「この切符があれば、あなたは現世へと還ることができます」

駅員は俊也を小さな部屋に連れて行き、この切符を手にする確率がいかに小さいか、どんなに幸運なことなのかを詳しく力説した。そして、決して切符を失くしてはならないと注意をした上で、再び部屋の扉に手をかける。俊也がまだ呆然としながらも謝辞を述べると、「あなたがうらやましい」と寂しそうに笑った。

扉が開け放たれる——そして。

「何だ…… あんたら」

俊也はゴクリと唾を飲んだ。扉の前に何千もの人々が立っていたのだ。皆不気味なほどに静まり返っているが、その目は俊也の右手に握られている赤い切符を凝視していた。震える右手に汗が伝う。

——決して切符を失くしてはいけません。

あの駅員の言葉が、何度も頭をよぎった。

「ど、どいてくれ！」

忍び寄る恐怖を振り切るように、俊也は人ごみに突進する。多少手荒でも、早くここから離れたいと思った。しかしその右手はすぐに捕らえられる。ぎよっとして俊也が振り返ると、痩せ細った老婆がしがみ付いていた。

「あたしにこれをおくれよ。どうして私がこのまま死ななきゃならない？ なあ……」

「は、離せ——！」

「いやだね、これは私のもんだよ!!」

抵抗する俊也に、老婆を筆頭にして次々と人が襲い掛かる。何か叫びながら走ってくる若者たち、俊也の右手に噛み付く女性、泣き叫ぶ子供の声……

そこはまさしく、地獄だった。

俊也は本能にまかせ、とにかく走った。息切れやめまいがして気が遠くなりそうだったが、老婆を引き剥がし、若者を突き飛ばし、それでも走るのを止めなかった。

やがて、俊也の目前に、停止している機関車が迫っているのが分かった。一瞬迷ったが、すぐ後ろに迫る人の群れを見て、手近な入り口に身体を滑り込ませる。急いで扉を閉め、客車に駆け込む。椅子の背もたれに手を置き、ぼろぼろになった切符を確認し、ようやく息を吐いた。

「俺は、これからどうすれば……」

この切符を持っている以上、ここから出られそうもない。だが、この世界から逃れるには、これが必要らしい。未だ状況が飲み込めない俊也は、窓の外の光景を見て頂垂れた。

「俊也さん!」

「俊也!?!」

その時後ろの席から二人の女性の声が響く。思わず身構える俊也だったが、その姿を見て驚愕した。

「母さん、百合子!?!」

「俊也さん!!」

妻の百合子が抱きついてくる。その後ろでは、母、さちが泣いていた。

「どうして……二人とも、事故で死んだはずじゃ……」

百合子の背に手を回しながら、俊也が呻く。これは夢か？夢なのか？

「あなたこそ、どうしてこんなところに！香奈を置いて死んでしまったの？」

百合子が涙目になって俊也の胸に突っ伏した。香奈、香奈と泣き叫ぶ。俊也は目を丸くした。

「死んだ！？俺が、死んだってのか!？」

「そうよ！ここは冥界と現世の狭間なもの。死なないと来ることは出来ないわ。あなた、覚えてないの？」

その言葉に全身から力が抜けた。俊也はへなへなと、木の床に座り込む。その拍子に、右手から切符が零れ落ちた。くすんだ茶色の床に、鮮やかな赤が飛び込んでくる。目の前の二人が息を呑んだのが分かった。

「俊也、もしかしてこれは甦りの切符じゃないのかい!？」

さちが震える両手で切符を包む。折れ曲がり、傷もついていたが、確かにそれは切符だった。

「そ、そうなのか？それは、駅員からおめでとつと言われて渡されたものなんだが……」

俊也がもともと答えた瞬間、百合子は泣きながらも満面の笑顔になり、切符にそつと口付けた。

「ああ、神様。感謝します。娘を、香奈を独りにさせないでくれて……！！」

そして二人は啞然としている俊也を立たせると、切符を握らせ、言った。

「さ、どうか早く現世に戻ってください。香奈が待っているわ」

「俊也、会えてうれしかったよ。これで安心してあの世へ行ける。全くお前は最後まで心配させおって」

名残惜しそうにしながらも、しつかりと別れを告げる二人。あまりにも突然すぎて、あの時は聞けなかった最後の言葉。俊也に焦燥感が込み上げる。

「待ってくれ！そうだ、百合子、もし本当に甦ることが出来るなら、お前が行ってくれないか？香奈には母親が必要なんだ！」

百合子の顔が辛そうに歪む。

「私も香奈に会いたい……もうどんなに大きくなっていることが。でも、それは出来ません。今更私が還つても、世間や香奈を混乱させてしまうだけ。だから、どうかあなた、私の分まで」

——香奈を幸せにしてあげて。

最後の方は顔を覆ってしまったため、小さくしか聞こえなかったが、俊也は百合子の肩に手を置き、何度も頷いた。頬を伝う温かな

感触に、いつしか自分も大粒の涙を流していたことに気づく。

そして俊也はもう一度外の地獄へ向かうべく、出口の扉へ向かうとした、その時。

ボ——ッ、ボ——ッ。

「——!!」

腹に響くような汽笛が鳴り、機関車がゆっくりと走り出したのだ。当然、扉が開くはずもない。「あなた！」

「俊也っ」という二人の悲鳴が届く。

俊也は一瞬のうちに決心すると、無言で傍の窓をこじ開けた。そして二人を振り返る。

「ありがとう、百合子。俺は絶対に香奈を幸せにしてみせる。だから……」

「ええ、分かっています、あなた。どうか長生きしてください」
百合子が微笑んだ。次の瞬間、俊也は窓枠を飛び越え、暗黒に身を投じる。赤い切符を、しっかりと握り締めたまま——。

+++++

闇をつんざく様な、けたたましいクラクション音が鳴り響き、俊也はつと目を開けた。慌てて前を見ると、信号はとっくに青になっ
ていたらしく、対向車は見当たらない。

——俺は、寝てたのか？

つい少し前のことなのに、自分が今何をしているのかを把握するのに時間がかかる。何か夢を見たような気がしたが、何も思い出せなかった。

「危ない危ない。俺ももう年かな」

ひとり言を言いながら、ゆっくりと右折する。何故か、死んだ妻の顔が思い浮かんだ。

——今日は、百合子の話でもしてやるか

そんなことを思いながら、俊也は娘のために少しでも早く帰ろうと、アクセルを踏んだのだった。

俊也の右手の中で、少しずつ赤い切符が消えてゆくのに気づかぬまま……

完

（後書き）

初めて作品を投稿しました。

まだまだ未熟者なので、これから精進したいと思います。

ここまで読んでいただいて、本当にありがとうございます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4554b/>

夜逝列車

2011年1月20日05時00分発行